

すくも
自主防災会だより
第7号

地域防災力づくりに寄せて

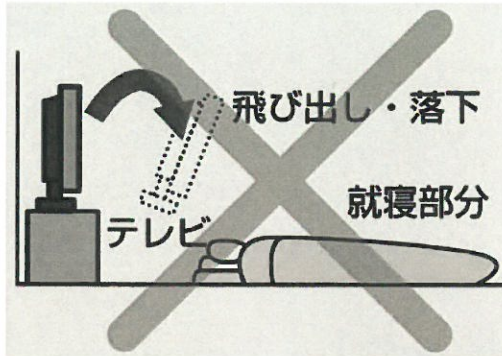
平成19年に自主防災組織を立ち上げて以来、至って地味に独自の防災活動を積み重ねている宇須々木自主防災会より、活動の焦点と基本的考え方(耐震化と避難の徹底こそが、われわれ地区民が生存できる命脈)について申し述べます。

1 耐震化について

○ 寝室を最優先に安全確保すれば激震からの生存確率は飛躍的にアップ(逃げる前に死なないで！)

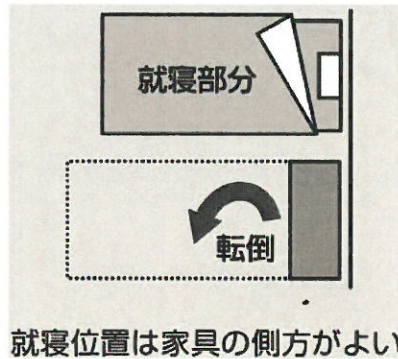
生存の可能性を上げるためには寝室の安全を確保することが最重要で、これこそが人的被害極限の合理的近道と強く認識しております。人は活動している場合にはとっさの判断で一定の対応行動が可能ですが、意識のない状態で危険が迫ったとしたり、そのまま何もできずに目が覚める前に命を落としてしまう可能性が大きいことを意識しなければ

なりません。だから、「寝室においては地震発生後の対応ではなく、平素いかに被害を受けにくい寝室にしておくか」ということが重要なポイントになるのです。この際、重量物などが室内の低い場所に置いてあるからと安心してはいけません。タテ揺れの巨大地震を想定すれば、モノは浮き上がりあなたを襲うかもしれないのですから。緊要不可欠なもの以外を寝室に置かないスタンスが必要です。



耐震化といっても多くのものを一度に実行するのはなかなか難しいものです。でも、誰もが毎日1/3程度の時間を

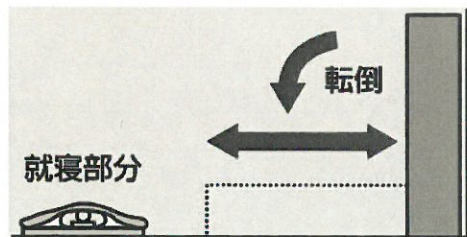
過ごすであろう揺り籠ともいえる自宅寝室、それでいて人が最も弱点を露呈する寝室、だったらせめて寝室ぐらいは家具などの配置を見直し、整理整頓に留意する程度の努力はしてみる価値があると考えられています。



就寝位置は家具の側方がよい

こんな小さなコストで大きな成果が得られるのなら、これぐらいなら、比較的容易にできそうな気になってきませんか。「寝床を変えれば生存確率90%アップ」となれば、これは何とすばらしい。「さあ今夜から実行ですぞ」と暗示にかけるがごとく?今年も防災訓練・防災学習会で繰り返し声を発してまいります。

2 避難について



就寝位置が正面の場合は家具の高さ以上に十分な距離をとる

○ 公表された被害想定「最大級巨大地震」の発生確率は「極めて低い」のに、そんなものに過剰反応してどうするの?

南海トラフで起こりうる「最大級の地震・津波」は、従来大級の地震モデルに、科学的知見の範囲で考えられる限りの被害拡大要因を加え出された数字であって、その発生確率は極めて低いのです。一方、南海トラフに震源域が連なる東海・東南海・南海地震は30年以内発生確率の切迫度が高まっていることは従来からいわれているとおりです。この両者を

混同して「最大級の超巨大地震が切迫している」という認識(誤解)で話をする人の何と多いことか。このことは、各自主防災会で防災・減災に取り組み、災害に立ち向かおうとする市民に「何をやってもどうなりやあ」との「後ろ向き意識」をまん延させ、対応意欲を削ぎ地域防災の支障にもなりかねません。日本列島に大きな被害を及ぼす地震のほとんどは、マグニチュード8級の海溝型地震とマグニチュード7級の内陸直下型地震であることから、耐震化および津波から迅速避難という「ごく普通の地震・津波対策」を充実させることこそがまず大切なのであって、このことが超巨大地震・津波が発生する万が一のケースにも十分減災につながってくれるということを再認識したいものです。

そして何より重要なのは、激震があれば、自分の身に起きることをできるだけ具体的に想像し「逃げる覚悟と腹積もり」をしておく。この執念めいた意識こそが、いざという時にあなたを守ることにつながるはずなのです。

宇須々木自主防災会
会長 河野典生